

唯一解が存在しない問題に対して折り合いをつける力の育成

鈴木 理生人

愛知教育大学 教育学研究科

s221s038@aeu.ac.jp

梅田 恭子

愛知教育大学

kumeda@aeu.ac.jp

本研究は、「唯一解が存在しない問題に対して、自分と異なる考え方などを踏まえた上で、合理的な解決策を見出して折り合いをつける力」の育成を目指している。本稿では、Common Sense が作成するデジタル・シティズンシップ教育のカリキュラムを援用して行った授業実践について報告する。

1. はじめに

これからの時代は“VUCA（不安定、不確実、複雑、曖昧）”な時代になっていくといわれており、ひとつの決まった答えがない社会の諸問題に対して、関係者が納得できるような解決策を見つけ、折り合いをつけていくことが必要になってくる^[1]。

本研究では、情報科における学習内容を通じて、「唯一解が存在しない問題に対して、自分と異なる考え方などを踏まえた上で、合理的な解決策を見出して折り合いをつける力」の育成を目的とし、授業実践を行った。

2. 実践報告

2.1 実践概要

中心となる学習テーマとして、情報社会で起こりうるジレンマなどの唯一解のない問題を設定する。授業の流れについては、米国のNPO法人であるCommon Senseが、デジタル・シティズンシップ教育のカリキュラムの中で用いるワークシート(Take a Stand Student Handout)を参考としている^[2]。ワークシートの構成は、表1の通りである。

表1 Take a Stand Student Handout^[2]

①Take a Stand	自分の立場を明確にする	個人
②Stand Back	客観的に見る	グループで共有
③Look Again	再び目を向ける	個人
④Look Beyond	先を思い描く	グループで共有

Common Sense のデジタル・シティズンシップ教育は、デジタル・ジレンマを題材にして教材を作成している。デジタル・ジレンマに対処する方法を身につけさせるこの教材は、情報科において唯一解が存在しない問題に対しての折り合いをつける力の育成を目指す本研究との親和性が高い。

2.2 授業対象

「社会と情報」を履修する愛知県内の高等学校の1年生2クラス（計60名）

2.3 授業展開について

それぞれの授業で設定する学習テーマに対して表2の流れで学習を進めていく。

表2 学習活動

①自分の考えを持つ	個人
②自分の意見を振り返る	グループで共有
③もう一度考える	個人
④今後につなげる	個人

①自分の考えを持つ では、学習テーマに対して、自分の意見や考えを書く。以降のグループでの話し合いの下地となる活動であるため、ここでは周りと相談などせず、個人で行う。

②自分の意見を振り返る では、グループのメンバー同士でそれぞれの意見や考えを共有する。個人活動では及ばなかった考え方や視点を得ることで、より多面的・多角的に物事を考察できることに気づくことと、それを通して他者視点の獲得の重要性を感じる事が期待される。

③もう一度考える では、②で得られた視点など

を踏まえて、もう一度学習テーマに対する考えや意見を記述する。その際、①から比べて考えや意見が変化したかどうかということと、その理由についても内省して記述する。

④今後につなげる では、③までの活動を通して得られた視点を別の文脈でも活用できるように、学習テーマを一般化した問いなどに対して、自分の考えを述べる。ここでも①同様に個人で活動することで、自分の意見や考えを持つようにする。

2.4 学習テーマについて

授業実践は、異なるテーマで2時間実施した。

【1 時間目】

「社会の中で、顔認証技術はどのように使われるべきだと考えますか?」という学習テーマを設定した。授業の導入として、JR 東日本が導入していた顔認証機能付き防犯カメラに関するニュース映像を視聴した。その中で防犯カメラに顔認証されることに対する市民の感情や、各国のプライバシーに対する意識の違いを学んでから、学習テーマに取り組んだ。

【2 時間目】

「100年前～100年後の間で、生まれ変わるならいつにする?」という学習テーマを設定した。授業の導入として、ここ100年間の情報技術の進展の一部を紹介し、情報技術が急激に向上してきていることや、それによって生活も大きく変化してきていることを学習した。その後、過去の100年を踏まえ、今後の100年の変化について予想させた。学習テーマに対しては、様々な観点から考えることができるが、今回は「情報技術の発達に伴う社会の情報化」という観点で考えるように指示した。

3. 生徒の記述

1 時間目の主な対立軸は、顔認証技術の進展による利便性の向上とプライバシーであった。生徒のワークシートには、「(顔認証機能付きの防犯カメラは) 多くあればよいと思っていたけど、犯罪者の人権やプライバシーの観点からも、少なすぎず多すぎないほど良い量が良いと思った」や「監

視される側にも人権がある」などの記述がみられた。グループ内での意見の共有を通して他者の視点を獲得し、それをもとに自分の意見を再構成している様子が読み取れる。他にも「自分の考えに加えて、犯罪者側の視点から考えても防犯カメラの設置のしすぎは良くない」というように、視点の獲得に加えて、柔軟な思考を働かせている生徒の記述もみられた。

また、自身の考えが変化していなくても、グループのメンバーの意見を踏まえ、「それを加味した上で、メリットの多さを考えて意見を変えなかった」といった記述がみられた。意見交換をしたグループのメンバーの意見に対して共感し、自分とは異なる考え方を尊重しつつ自分の考えを述べている様子が読み取れる。

4. おわりに

生徒の記述などをもとに、実践の目標に対する評価規準を「他者視点の獲得」「共感・尊重」「思考の柔軟性」の3点に設定した。今後は、その規準に則してルーブリックを作成するなど、生徒のワークシートの評価方法についても確立させていく。

今回の実践では、教科としての学習評価が不十分であるという課題が残った。今後は、実践を教科の学習内容とより深く関連付け、教科の目標や学習評価の3観点に照らした評価方法を確立させることなどを目指して研究を進めていく。

参考文献

- [1] 白井俊：OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来、ミネルヴァ書房(2020)。
- [2] Common Sense Education：Teach Digital Citizenship with Dilemmas and Thinking Routines, Take a Stand Student Handout <https://www.commonsense.org/education/digital-citizenship/digital-dilemmas> (参照：2022/05/30)。

謝辞

本研究の一部は、JSPS 科研費 JP17K01079 の助成を受けたものです。